

或る農業研究員の 放浪記 (11)

さすらいの研究者

谷田部海軍航空隊に関する放浪記の訂正と補遺

1. 「第4話 終戦から80年、谷田部・観音台の先史1」(メルマガ第182号、2025年7月発行)の一部を訂正します。

該当稿では、6ページ目(ページ番号が振ってありませんでした)の下から12行目:

「また、特攻兵器のひとつである「桜花」(おうか)の実験・訓練部隊であった第七二一航空隊は、一時、本拠地を谷田部に移しましたが、その後を継いだ第七二二航空隊(通称:竜巻部隊)が桜花の錬成部隊として谷田部で訓練を行いました。竜巻部隊の名称は、谷田部飛行場内にあった「竜巻山」に由来するものです」と記していました。

その後、「竜巻山」がどこにあったのか気になり調べていたところ、「竜巻山」および竜巻部隊は、谷田部ではなく、神之池航空隊(茨城県・鹿嶋市)にあったと判断されることからここで以下のように訂正(削除)したいと思います。

~~「また、特攻兵器のひとつである「桜花」(おうか)の実験・訓練部隊であった第七二一航空隊は、一時、本拠地を谷田部に移しましたが、その後を継いだ第七二二航空隊(通称:竜巻部隊)が桜花の錬成部隊として谷田部で訓練を行いました。竜巻部隊の名称は、谷田部飛行場内にあった「竜巻山」に由来するものです⁷⁾」~~

根拠を以下に記します。

1. 当方が引用した資料の元の文献となっている「神雷部隊出撃」、歴史群像 2006年6月¹⁾を確認したところ、「竜巻山および竜巻部隊」について下記のように記されていること。
「…この桜花要員と残された陸攻隊によって二月十五日に第722海軍航空隊が編成され、神ノ池基地内にあった龍巻山(実際は小高い丘)から名前を採って「龍巻部隊」と別称した。龍巻部隊は終戦まで桜花搭乗員を養成すると共に、桜花隊の損耗に見合う隊員の補充にあたった。」
2. 伊藤純郎著「フィールドワーク茨城県の戦争遺跡:学び・調べ・考えよう」²⁾、2008においても同様の記載があること。
3. さらに、確認のため、神雷・龍巻部隊史にあたりました。部隊史は海軍神雷部隊戦友会編著「海軍神雷部隊」³⁾です。しかし、第七二一飛行隊が「一時、本拠地を谷田部に移した」もしくは「第七二二飛行隊が桜花の錬成部隊として谷田部で訓練を行った」という内容の記載は見当たりませんでした。

以上から、該当文章は訂正削除のうえお詫び申し上げます。

なお、谷田部航空隊の一部には利用目的が不明な施設があり、今のところ、それらについて言及している文献や資料を見つけられていません。戦時中の軍事施設のことで、ほとんどすべてが機密事項であったため無理もないのですが、終戦直後の米軍への引き渡し時のリストの中

の飛行場橋の南側、農研機構農村工学研究部門を中心とした敷地に、初期の谷田部不時着陸場があったことがわかります。



図2 初期の谷田部飛行場の範囲

現在の国道354号線から関東鉄道バス谷田部車庫や学園病院の前を通って農研機構に向かう道は、飛行場の開設のため、旧小野川村からの土地の献納によってできたものです。

昭和9年6月に筑波郡小野川村役場から海軍省宛で下記の上申書が出されています(アジア歴史資料センター⁴⁾、C5035246600)。

第二六三號 筑波郡小野川村役場 (昭和九年六月廿三日)

上申書

海軍省ニ於て計畫中ノ谷田部飛行場建設ニ當リ最モ村民ノ熱望スル處今般実現ノ運ビニ至ラレ候ニ就テハ本村ハ軍責ノ重ナルヲ鑑ミ飛行場正面ヲ小野川村地籍ニ設ケラレシムルコトヲ懇願シガ正門ニ通ゼシムルニ本村ニ於テ実地踏査候處土浦町ヨリ谷田部町ニ通ズル県道ヨリ最モ近ク現地畑ニシテ平地道路トシテ好適地ナルコトヲ認メ該地所有人谷田部町〇〇氏ノ承諾ヲ得同氏ヨリ道路敷地トシ海軍省ノ設計面ノ全面積ヲ海軍ニ献納セシムルコトニ運ビ居候ニ付本村並ニ〇〇氏ノ誠意アル一端ヲ御含ミ下サレ是非共受納御設計相願度上申候也

昭和九年六月三十日

茨城県筑波郡小野川村長 一石安次
海軍省御中

上申書の現代語訳を下記に記します(chatGPT 使用)。

筑波郡小野川村役場 (昭和9年6月23日) 上申書

海軍省において計画中の谷田部飛行場の建設については、村民が最も強く望んでいたところであり、このたび実現する運びとなりました。これにあたり、本村としてはその重要性を考慮し、飛行場の正面を小野川村の地内に設けていただきたく、強くお願い申し上げます。

また、その正門へ通じる道路について、本村で実地調査を行ったところ、土浦町から谷田部町へ通じる県道に最も近く、現地は畑で平坦であり、道路として最適な土地であることを確認いたしました。

さらに、当該地の所有者である谷田部町の〇〇氏の承諾を得て、同氏より道路用地として、海軍省の設計図に基づく全ての面積を海軍へ献納していただくこととなっております。つきましては、本村ならびに〇〇氏の誠意の一端をご理解いただき、ぜひともこれを受け入れ、設計に反映していただきますようお願い申し上げます。

昭和9年6月30日

茨城県筑波郡小野川村長 一石安次
海軍省御中

これをみると、昭和9年6月の時点で、谷田部飛行場は“計画中”と書かれていますので、まだこの時点では建設が進んでいないかもしくは使用が開始されていなかった可能性があります。なお、昭和11年の関連図面(アジア歴史資料センター⁴⁾, C05034707900)には、海軍用地として初期の谷田部飛行場の範囲(図2の赤線囲み)が記載されています。

3. 遠見塚に建設された三角兵舎

1945年(S20)6月10日の阿見大空襲によって大きな被害を受けた土浦航空隊でしたが、兵舎を損失したため、所属していた予科練生の2個分隊(おそらく50名×2程度の規模)が谷田部航空隊に分散配置されました。谷田部に配属されたものの、谷田部には予科練生が訓練する施設がなく、やることといったら雑役しかありませんでした。この雑役の一環として遠見塚(図3)に建設されたのが三角兵舎です。兵舎が空爆に晒されるような状況に備えて、分散収容するための施設として造られましたが、実際に使われることはなかったそうです⁵⁾。なお、三角兵舎とは、陸海軍の別、地上部隊と航空部隊との別を



図3 遠見塚の位置

問わず日本各地に規格化されて建築された兵舎です(図4)。上空から見えないように松林などの中に穴を掘り、半地下構造を持つ、幅5m、長さ10m、高さ2.5mの屋根を架けるだけの簡単な構造でした。



三角兵舎の外観



三角兵舎の中の様子

図4 三角兵舎(知覧特攻平和会館(鹿児島県南九州市)内にあるレプリカ)

4. 谷田部海軍航空隊出身の特攻隊「昭和隊」のその後

谷田部航空隊で特攻隊員として選抜された搭乗員は、昭和20年4月以降、鹿児島県鹿屋（かのや）市にあった鹿屋海軍航空基地に進出して出撃を待ちました。「昭和隊」の隊員は、神雷部隊として知られる第721海軍航空隊の作戦指揮下に入り、基地の西側にあった野里国民学校を宿舎としました。現在、野里国民学校の跡地（図5）には、当時使われた国旗掲揚台が残っており、昭和隊の足跡が残されています。そこでのできごとや一部隊員のエピソードなどは、同じく昭和隊員として現地に異動し、戦後まで生きながらえた杉山幸照氏の著書⁶⁾に詳しく記されています。もし、旅行などで南九州（図7）に行くことがあれば、当時の資料が多く展示されている「海上自衛隊鹿屋航空基地史料館」（図6, 8）とともに訪問することをおすすめします。



図5 野里国民学校跡に残る国旗掲揚台



図6 昭和隊の出撃の様子(史料館)



図7 南九州の主な特攻基地



図8 野里国民学校跡と史料館の位置図

参考資料

- 1) 加藤浩(文)「神雷部隊出撃」、歴史群像 2006年6月 No.77、182-189
- 2) 伊藤純郎「フィールドワーク茨城県の戦争遺跡:学び・調べ・考えよう」、2008、平和文化
- 3) 海軍神雷部隊戦友会編著「海軍神雷部隊」(非売品)、1996年、興学社印刷発行
- 4) アジア歴史資料センター、リファレンスコード:C5035246600, C05034707900
- 5) 吉田一也「海軍生活の回想」(非売品)
- 6) 杉山幸照(1972)海の歌声—神風特別攻撃隊昭和隊への挽歌—、行政通信社